

外国人の見た五箇山と白川郷～観光地としての魅力の検討～

Study of Gokayama and Shirakawa-go from foreigner's point of view

佐藤悦夫

SATO Etsuo

観光の専門家である外国人の研修員のデータに基づき、観光地の魅力や観光資源の見せ方について五箇山と白川郷を比較しながら検討した。観光地の魅力は、まち全体の景観や観光施設だけでなく、地域住民との交流にあると考えられる。地域住民の語り、岩瀬家、村上家、和田家のような観光客に公開されている合掌家屋における当主の語り、喫茶店、土産物店、食堂、民宿における店主の語りが重要である。その「語り」は、ガイドブックに記載されているようなフォーマルな内容ではない。「語り手の想い、こだわり」、「語り手の体験」など、インフォーマルだが「真摯」な語りが観光客に強い影響を与えらると思われ。地域の人々と観光客がどのように出会い、その人々とどのようにかかわりあったのかが重要であろう。

キーワード：五箇山、白川郷、観光体験、観光客の持つ「ものがたり」

1、はじめに

1995年に世界遺産に登録された五箇山や白川郷は、2015年に世界遺産登録20周年を迎え、世界遺産マスタープランも作成された（白川村2010、南砺市2012）。また2015年3月14日には北陸新幹線が開業し、飛騨・北陸地域においては新しい観光ブームが起きると考えられている。また、新幹線の開業をにらみ富山県では大型アウトレットモールの開設や外資系スーパーの出店なども予定されている。このような社会状況の中で、もう一度観光地の魅力形成の在り方や観光資源の見せ方を考えることは重要と思われる。

本稿では、観光地の魅力形成において何が重要なのかを考える第一歩として、五箇山と白川郷を訪れた外国人が2つの地域を比較してどのように評価したのかを明らかにする。この外国人とは、2013年度に富山国際大学がJICA北陸から委託されて行った観光研修に参加した西アフリカ諸国の観光の専門家10人ならびに2014年度に同じくJICA北陸主催の観光研修に参加し、筆者の講義を受講した観光の専門家8人である。次に、観光客の満足度に影響を与えている観光客の「観光体験」という視点から観光資源の見せ方を検討した。観光地の魅力形成においては、観光地の特徴や独自性をいかに示すかという議論がよく行われるが、本稿では観光客の持つ「ものがたり」をいかに紡ぎだすのかという視点から検討した。

2、2013年度「仏語圏アフリカ 持続可能な観光開発」(JICA研修)の概要

2-1、研修概要¹

(1) 研修期間

2014年2月10日～2014年3月16日

(2) 研修員人数

研修員は、ジブチ(2名)、ガボン(2名)、セネガル(2名)、コートジボアール(3名) テュニジア(1名)の観光行政に携わる国家公務員10人であった。

2-2、研修内容

(1) 研修の目標

以下の単元目標にもとづいて講義、発表・討議、視察が組まれた。

- ① 自国における観光資源の価値を判断し活用できる。
- ② 日本の観光概要を学ぶ。
- ③ 地域の人々の生活向上を考えた観光開発を計画することができる。
- ④ 地域の文化を保全・活用した持続可能な観光開発計画をすることができる。
- ⑤ 自然環境の保全に配慮した持続可能な観光開発を計画することができる。
- ⑥ 地域の観光開発において必要な段階的なプロセスを踏まえた計画の遂行ができる。
- ⑦ アクションプランを作成する。

(2) 五箇山白川郷の講義、視察

研修の目標④「地域の文化を保全・活用した持続可能な観光開発計画をすることができる」の講義の事例として五箇山、白川郷を取りあげた。研修では、五箇山、白川郷の観光の現状や課題を講義した後、現地視察を行った。五箇山では、道の駅上平、岩瀬家、菅沼集落、五箇山観光案内所、五箇山荘を視察した後、相倉集落に宿泊した。翌日は、白川郷に向かった。白川郷では、その概要について講義を受けた後、展望台、白川郷観光案内所、荻町散策、和田家を散策した。

2-3、研修員による五箇山と白川郷の評価

現地視察後に研修員に2つの地域の評価をしてもらった。研修員はそれぞれの国で観光行政に携わっている人々であり、観光行政官の視点から見た2つの地域の評価を以下提示する(表1)。

¹ : 「2-1 研修概要」「2-2 研修内容」に関しては、JICA から許可を得て JICA 資料を参照して作成した。2013 年度の研修内容に関しては、富山国際大学現代社会学部が中心となって作成した。

表 1：2013 年度研修員による五箇山と白川郷の評価

研修員	五箇山	白川郷
A	<ul style="list-style-type: none"> ・岩瀬家は茅葺き屋根を除き、内部は改装されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・和田家には改造の跡があり、家屋上層部の縄はすべて新しかった。 ・個人的には白川郷を選びたい。なぜなら、この村は、風光明媚な景色を持つ観光が盛んな村だからである。外国人観光客にとって大事なものは、手工芸品であり、荻町には、手工芸品を扱う店もあるからである。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・地元住民が観光客に説明をしてくれる（岩瀬家のご当主）。 ・五箇山は、景観が変化しつつある白川郷とは違い、近代的過ぎる施設はない。道路も基盤の目状や長方形ではない。 ・五箇山はわずかな時間で一周できる・ 	<ul style="list-style-type: none"> ・白川郷の案内人はプロ的である（和田家のガイド）。 ・白川郷はきちんと構想されたまちづくりのモデルである。道は区画整備され、店舗も並んでいる。 ・白川郷を訪れるには一日かけても足りない。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・岩瀬家の保存努力 ・合掌造り家屋の持ち主の高齢化 ・保全のための支援の可能性 ・案内人の高齢化、家屋の暖房法の改善 	<ul style="list-style-type: none"> ・美しい景色 ・和田家の案内の仕方がよかった。 ・町の見学コースの案内をし、必要な説明を行うガイドを配備する必要がある。
D	<ul style="list-style-type: none"> ・私は五箇山を再訪したい。なぜなら、岩瀬家の方が、白川郷の和田家よりも本物らしさやユニークさの面においてよく保存されているからである。 ・五箇山の方が、その歴史をより生き生きと、より現実感をもって感じさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・和田家は観光客の便利さと快適さへの配慮から、改造されている。 ・白川郷には、五箇山よりも便利さがあり、旅行者も滞在しやすいだろう。なぜなら、観光案内所、土産物店、案内板などが完備されているからである。これは五箇山にはない点である。
E	<ul style="list-style-type: none"> ・観光設備やサービスは余り整備されていない。 ・自然のままの空間づくり ・観光客を迎えるためと地元住民のプライバシーを守るための両面で、バランスの取れた施策を行う必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光設備やサービスが整備されている。 ・保存地区と非保存地区ゾーンとの住み分け ・観光客としてなら、白川郷を訪れてみたい。 ・多様な観光設備が整備され、組織化されたさまざまな観光サービスが提供されている。遺産地区は、駐車場などの他のゾーンと明確に区分けされている。
F	<ul style="list-style-type: none"> ・五箇山の 2 つの世界遺産地区は家屋、村の環境および古来からの住民の暮らしを守るために多くの努力を傾注している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・白川郷の遺産地区は合掌造り家屋があるにもかかわらず、近代的な佇まいがある。そこでは、車の往来がある。案内標識は 4 カ国語で表示されている。

<p>G</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・岩瀬家は昔日の面影を保っているが、和田家には一部改装の跡が見られ、これはおそらく、荻町が漂わせる近代的なイメージに合わせる必要から生じたものかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・荻町のほうが菅沼、相倉よりも売れ行きが良いように見える。したがって、確かに車の往来はあるが、町のイメージアップとそのプロモーションにおける取り組みの面で、荻町の方が我々の注意を引いた。 ・再訪したいのは荻町である。なせなら、そこには、合掌造り家屋以外のものがあるからである。
<p>H</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・五箇山は観光地として多くの強みを有している。本物の歴史的合掌造り家屋が点在する集落の景観は素晴らしい。菅沼や相倉地区では地元住民と触れ合える。これは、地元住民との交流を可能にし、地元の文化や慣習を体験できる絶好の機会となる。地元の新鮮な食材、果物、川魚を用いた農産品・食品はこの地域のプロモーションにとってプラスとなる側面である。岩瀬家の訪問は家族的で稀有な体験となる。囲炉裏を囲み、お茶をいただきながらのおもてなしと家屋の説明は多くの旅行者を魅了する違いない。なぜなら、旅行者はくつろぎ、他の客との差別化を感じるからである。しかしながら、今後観光地として適切に開発される余地がある。 ・五箇山では、観光客の興味を引きにくい。土産物屋やレストランも足りない。景観は素晴らしいのだが、手を入れておらず、自然のままである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これに対し、白川郷は観光地として十分開発されている。遺産地区は組織的、専門的に管理されている。和田家は観光目的として非常によく維持管理されており、案内の仕方もプロ的である。白川郷は、整備された空間、レストラン、橋を渡ることや小道を伝った散策など、観光的魅力に事欠かない。町は活気に溢れ、快適である。 ・観光案内所や駐車場もあり、よく管理された観光地であることを示している。だが、この問題点であるコミュニケーション（言葉の壁）、適切な文献のなさ、受入れ体制の不備（有資格者の不在）を改善するべきである。 ・また、旅客の滞在時間を延ばすため、宿泊施設（キャンプ場、ホテル、農家民宿など）、レジャーセンターやレジャー活動も新設するべきである。
<p>I</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・和田家の方が岩瀬家よりも組織化されている。 ・白川村は第5次総合計画を策定している。この総合計画の目的は、白川村を日本一美しい村にすることである。このために、受入れ体制や観光交通対策、景観保全、滞在観光に向けた対策などを実施している。以上の違いを考慮し、白川郷を再訪したい。

J		<ul style="list-style-type: none"> ・菅沼、相倉、荻町のどの町を訪れたいかと言えば、白川郷を訪れたい。なぜなら、五箇山よりも観光設備が整備されているからである。再訪したい町は荻町である。
K	<ul style="list-style-type: none"> ・景観の素晴らしさ（山並み+世界遺産、合掌造り家屋など） ・環境および自然保全にとって極めて重要な役割 ・民宿存在が旅行者に住民の日常生活を体験させる。静寂さと癒しを求める者にとっては本物の場所。この種の観光の場合、個人的には、五箇山を再訪したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・景観の素晴らしさ（山並み、世界遺産、合掌造り家屋など） ・環境および自然保全にとって極めて重要な役割、地方自治体の役割、NPO や住民の役割 ・活気、雰囲気、駐車場、買い物、渋滞があるが、観光客は、道路の後ろにあるものに関心を抱かず、いろいろな家屋を発見しようとはしないし、住民の日常生活にも参加しない。

(注) 日本語訳は、JICA コーディネーターの久保セツ子氏に依頼した。

3、2014 年度「JICA 北陸 観光振興政策」研修の概要

3-1、研修概要²

(1) 研修期間

2014 年 9 月 21 日～2014 年 10 月 30 日

(2) 研修員人数

研修員は、チュニジア（1名）、ウルグアイ（1名）、南アフリカ（1名）、エリトリア（1名）、ボツワナ（1名）、レソト（1名）、コンゴ（1名）、ジンバブエ（1名）の観光行政に携わる国家公務員 8 名であった。

3-2、研修内容

(1) 研修の目標

以下の単元目標に基づいて講義、発表・討議、視察が組まれた。

- ①自国における観光振興政策立案に係る問題点とその対応策の動向を説明できる。
- ②日本（中央政府）における観光振興政策とその手法について理解を深める。
- ③政策立案に必要な情報収集、分析、計画策定、モニタリングの方法を理解できる。
- ④地方自治体における観光振興政策や実務、具体的な手法について理解を深める。
- ⑤自国で実現可能な観光振興に係る施策、実践に関する改善計画を策定する。

(2) 五箇山白川郷の講義、視察

研修の目標④「地方自治体における観光振興政策や実務、具体的な手法について理解を深

² : 「3-1 研修概要」「3-2 研修内容」に関しては、JICA から許可を得て JICA 資料を参照して作成した。
なお五箇山、白川郷の視察の内容は、筆者が作成した。

める」の関連として五箇山、白川郷を取りあげた。研修内容は、五箇山、白川郷の観光の現状や課題を講義した後、現地視察を行った。五箇山では、道の駅上平、岩瀬家、菅沼集落、五箇山観光案内所を視察した後、相倉集落に宿泊した。翌日は、道の駅たいらを視察して白川郷に向かった。白川郷では、展望台、白川郷観光案内所、和田家を訪れ、荻町を散策した。

3-3、研修員による五箇山と白川郷の評価

現地視察後に研修員に2つの地域の評価をしてもらった。研修員はそれぞれの国で観光行政に携わっている人々であり、観光行政官の視点から見た2つの地域の評価を提示する(表2)。

表2：2014年度研修員による五箇山と白川郷の研修員による評価(要約)

研修員	五箇山	白川郷
A	<ul style="list-style-type: none"> ・美しい地域であり、伝統的な生活スタイルが残っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レストランやお土産物店なども整備されている。しかし、あまりにも観光開発され過ぎていて、伝統的な生活スタイルが失われているようだ。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・彼らの生活、伝統ならびに新しいモノと伝統的なモノをうまく組み合わせている。 ・自然と本物性が見られる町 	<ul style="list-style-type: none"> ・五箇山と比較して観光客が多い。さらに観光地としても開発されているが、伝統的な部分が失われているようだ。 ・大型の駐車場、多言語のパンフレット、看板などがある。観光客の受け入れに対応した町である。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろを囲んでお茶のサービスを受けるなど伝統的なスタイルが良く示されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統的な合掌家屋も見られるが、町全体としては新しい家もみられ、五箇山ほど伝統的なスタイルが残っていない。 ・多言語のパンフレットなど観光客の受け入れ体制が整っている。
D	<ul style="list-style-type: none"> ・岩瀬家で見られた観光客の受け入れスタイルが良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町の中の土産物店や展望台など観光客が多すぎるので、長時間滞在しようとは思わない。 ・和田家の対応は、ややビジネス的である。
E	<ul style="list-style-type: none"> ・集落は、周辺環境とうまく溶け合っているが、五箇山に関する情報が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的建造物と近代的建造物が入り混じっている。また、お土産物店やレストランが道路の両脇に集中している。その結果、観光客の混雑を招いている。
F	<ul style="list-style-type: none"> ・非常に静かでリラックスできる場所である。また、日本人の伝統的な生活スタイルを学べる場所である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客用のいろいろな施設があり、多くの観光客でにぎわっている場所である。

G	<ul style="list-style-type: none"> ・ 伝統芸能や伝統産業（和紙）が守られている地域。観光資源は、国道 156 号沿いに分散している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観光資源が荻町に集中している。
H	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリジナルの部分が良く残っている。岩瀬家のような合掌家屋の内部を見学できる場所は、ツアーのルートに入れると良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリジナルの部分とモダンな部分が入り混じっている。 ・ 展望台から見る荻町の全景は非常に素晴らしいが、町の中はお土産物店やレストランが多い。やや観光客対応のビジネスが多い。

(注) 英文のコメントを筆者が日本語で要約した。

4、観光資源の見せ方に関する考察

4-1 JICA 研修員の評価のまとめ

五箇山の評価できる点は、山を背景とする周辺環境の美しさと合掌集落の美しさ、また岩瀬家で見られた囲炉裏を囲んで受けた説明などが高く評価されている。一方、観光地としての施設の不十分さや情報不足などがマイナス点として挙げられている。

一方、白川郷は観光地としての駐車場整備、土産物店などの施設の充実、まち全体を眺望できる展望台からの景観などがプラスの評価を与えている。一方マイナス点としては、観光客の多さ（観光地として開発され過ぎ）、茅葺の合掌家屋と茅葺でない家屋の混在などが挙げられている。

日本人とは異なるまたは一般の観光客とは異なる文化的、社会的背景を持つ研修員の評価は、必ずしも一般化できるものではないが、観光行政の専門家の評価という限定された研究のデータとして活用したい。

4-2 観光資源の見せ方に関する考察³

観光資源、特に五箇山や白川郷のように住民の生活空間が観光の対象となっている地域では、観光客が見ることのできる観光資源は、観光客用にアレンジされた部分である。その中で、観光客の満足度を高めるものは、提供されるサービスや観光施設の充実は言うまでもないが、観光客の求める「ものがたり」をいかに紡ぎだすのかが重要となる。

橋本によると、観光客は自分なりの「真正なものがたり」あるいは「自分なりに納得のいくものがたり」を求めているという。そして、思い出深い観光となるためには、観光客自らが構築する「ものがたり」の質が問題となる。そして「自分なりの」「真正なものがたり」を構築できたと評価される場合は、地域の人々との出会い、ガイドとの出会いが大きく関係す

³ : 観光資源の見せ方に関する考察は、観光学（観光人類学）においては、重要なテーマである。そこには、「本物」と「演出された本物」などの議論（プーアスティン 1964、池田 1996、高岡 2006）、「地域性」に関する議論、特に地域性の形成において重要なのは、地域の歴史性なのか、地域の歴史性にとらわれない新しい観光文化創造活動そのものなのかに関する議論（橋本 2011）、あるいは観光施設やまち並みのつくり方や提示の仕方に関する事例研究など様々な視点から議論されている。本稿では、橋本（橋本 2011）の提示する観光客の「観光体験」視点から考察する。

る。観光客は、「ちょっとした自己発見」や他者との間に構築される「真摯な」人間関係⁴の中で「自分なりの」「真正なものがたり」を見出し、満足感を得るのである（橋本 2011 : 240-241）。

JICA の研修員は、観光行政の専門家として観光地の施設の在り方、駐車場の在り方、情報発信の在り方などを評価するが、一人の観光客として訪問するとしたら2つの観光地に対してどのような印象を持つのだろうか。「再度訪問するとしたら五箇山か白川郷」かの問いに対しては、五箇山を選択する人、白川郷を選択する人がそれぞれいるが、そのように選択する理由には違いがある。表1から選択理由を抽出した。

<五箇山を選択する理由>

- ・私は五箇山を再訪したい。なぜなら、岩瀬家の方が、白川郷の和田家よりも本物らしさやユニークさの面においてよく保存されているからである。五箇山の方が、その歴史をより生き生きと、より現実感をもって感じさせる。
- ・民宿の存在が旅行者に住民の日常生活を体験させる。静寂さと癒しを求める者にとっては本物の場所。この種の観光の場合、個人的には、五箇山を再訪したい。
- ・菅沼や相倉地区では地元住民と触れ合える。これは、地元住民との交流を可能にし、地元の文化や慣習を体験できる絶好の機会となる。地元の新鮮な食材、果物、川魚を用いた農産品・食品はこの地域のプロモーションにとってプラスとなる側面である。岩瀬家の訪問は家族的で稀有な体験となる。囲炉裏を囲み、お茶をいただきながらのおもてなしと家屋の説明は多くの旅行者を魅了する違いない。なぜなら、旅行者はくつろぎ、他の客との差別化を感じるからである。

<白川郷を選択する理由>

- ・個人的には白川郷を選びたい。なぜなら、この村は、風光明媚な景色を持つ観光が盛んな村だからである。外国人観光客にとって大事なものは、手工芸品であり、荻町には、手工芸品を扱う店もあるからである。
- ・観光客としてなら、白川郷を訪れてみたい。多様な観光設備が整備され、組織化されたさまざまな観光サービスが提供されている。遺産地区は、駐車場などの他のゾーンと明確に区分けされている。
- ・再訪したいのは荻町である。なぜなら、そこには、合掌造り家屋以外のものがあるからである。
- ・和田家の方が岩瀬家よりも組織化されている。白川村は第5次総合計画を策定している。この総合計画の目的は、白川村を日本一美しい村にすることである。このために、受入れ体制や観光交通対策、景観保全、滞在観光に向けた対策などを実施している。以上の違いを考慮し、白川郷を再訪したい。
- ・菅沼、相倉、荻町のどの町を訪れたいかと言えば、白川郷を訪れたい。なぜなら、五箇山よりも観光設備が整備されているからである。再訪したい町は荻町である。

⁴ : 橋本によると「現代の観光客は、観光対象が観光客用に切り取られて提示されていることは十分承知している。観光の現場では、昔ながらの伝統的な服装をしていても、日常的にはTシャツを着て腕時計をし、家では現代的な生活をしていることは想定内の事柄である。またそこで上演される舞踏や儀礼が観光客用にアレンジされていることも想定内である。観光の現場で重要なのは、ホスト側や上演者の一生懸命伝えよう、演じようとする真摯な姿勢であり、この部分が評価されれば、両者の出会いや交流が<真正なものがたり>を紡ぎだすことができるのである」と述べている（橋本 2011 : 243）。

筆者は観光地の魅力は、まち全体の景観や観光施設だけでなく、地域住民との交流にあると考える。地域住民の語り、岩瀬家、村上家、和田家のような観光客に公開されている合掌家屋における当主の語り、喫茶店、土産物店、食堂、民宿における店主の語りが重要である。その「語り」は、ガイドブックに記載されているようなフォーマルな内容ではない。「語り手の想い、こだわり」、「語り手の体験」などインフォーマルだが「真摯」な語りが観光客に強い影響を与えらると思われる。地域の人々と観光客がどのように出会い、その人々とどのようにかかわりあったのか重要である。

また、五箇山における外国人の個人旅行者とのとの交流の重要性については、2014年に言及したが(佐藤 2014)、外国人が五箇山の歴史性、伝統文化を理解しそれを評価している点を考えると、五箇山で外国人と地域住民、外国人と日本人旅行者の交流は十分可能であると思われる。今後は、どのようにして交流の場を作るかが課題である。

参考文献

池田光穂

- 1996 「コスタリカのエコツーリズム」青木保 他編『岩波講座 文化人類学 第7巻：移動の民族誌』pp.61-94 岩波書店

佐藤悦夫

- 2014 「観光資源としての世界遺産～平泉と五箇山の比較」『富山国際大学現代社会学部紀要』第6巻、pp.75-86 富山国際大学

白川村

- 2010 『白川村世界遺産マスタープラン』白川村

高岡文章

- 2006 「観光における<本物>と<偽物>～オーセンティシティ論再考」安村克己、遠藤英樹、寺岡慎吾編 『観光社会文化論講義』pp.29-37 くんぷる

南砺市

- 2012 『南砺市五箇山 世界遺産マスタープラン』南砺市

橋本和也

- 2011 『観光経験の人類学～みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる～』世界思想社

ブーアスティン、D.J

- 1964 『幻影の時代～マスコミが製造する事実～』(後藤和彦・星野郁美 訳) 東京創元社